

---

# 『とある休日』

ジン・ココノエ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

『とある休日』

### 【著者名】

ジン・ココノH

N7894V

### 【あらすじ】

もしかしたらあつたかもしれない、クロノとなのはの一日。  
ぶっちゃけると「原作CPが……」という理由だけで書いた作品です。

## 朝のひとりや（前書き）

- ・初めに

原作とは違う部分が多いかと思いますので、その辺に注意を。  
あとは……自分トコのサイトであげた短編とかは見てなくても大  
丈夫な筈、多分。

それでも構わないという方のみ、先へお進み下さい。

## 朝のひととかけ

ふと、田が覚めた。

時計を見れば……いつも起きる時間より、ほんの少しだけ早い時間。

隣を見れば、年齢の割りに幼く見える男性がまだ眠っている。

元々あまり朝の強くなかった私。

それでも仕事の関係もあって大分克服できたと思つ。

「……シャワー浴びてこよ」

少しフタフタする。

意識も少しだけ、ぼんやりしてゐる氣がある。

ダメだつて言つたのに……全然手加減してくれないんだもん。

思い出すのは昨日の夜の事。

久しぶりだつたから、分からぬいでもないけど……それでも頑張りすぎだよ。

心の中で少しだけ愚痴を言つて、少し温めに設定したシャワーを浴びる。

今日が休みで良かった。

こんな状態で仕事に行つたら、怖い怖い副隊長さんに怒られちゃうもん。

「…………うあつ」

見ていたのは鏡に映つた自分の姿。

もう少し大きければなあと思わないでもない。

まあ、気になつたのはソレではなく……鎖骨の上、首の辺り。

首に跡残つてる……今気付かなかつたら危なかつたよ。

今日はこの後お出かけの予定だつたのに、こんなに残したままだつたら……

もう、普段はそういう処見せない癖に……その気になると本当に底なし。

求めてくれるのは嬉しいけど……ね。

そういえば……髪、少しだけ切るつかな？

大分伸びてきたし、そろそろ少し切つてもいいかな。

それか髪型変えてみよつかな……お母さんみたいにするのもいいかな。

それに切るって言つたら、反対はしないと思うけど残念がるんだろつなあ……

「…………変な処で可愛いよね」

今もベッドでまだ眠ってる、愛しい人。

時々意地悪で……凄く、凄く優しい人。

私の大事な、この広い世界で一番大好きな人。

今はお互い忙しくてなかなか会えないけど、今はそれでも構わない。

でも、もしもあの人の子供を授かる事になつたら、私はたぶん……仕事を辞める。

だつて、私は一人の寂しさをよく知つてるから。

あの人も一人でいる事の寂しさを知つてるから、反対はされないと思う。

管理局の……教導隊。

私の夢だった場所。

今、私は四年前の大怪我で喪いかけたその夢を掴み、そこにいる。

機動六課には『出向』という形で関わっている。

でもね、今の私の夢は違うんだよ？

少し違うね……あの人と一緒にになった日から、変わったんだ。

私はあの人と、あの人との子供と一緒に幸せに暮らしていくならそれでいいんだ。

フュイトちゃんやはやてちゃんには悪いけど、私は遠くない未来……管理局には居ないと思つ。

私は私だけの幸せを見つけちゃったから。

二人にも良い人ができるといいんだけど、どうかな？

高ランク魔道師、しかも階級が高い女性は婚期を逃しやすいつて、誰かが言つてたからちょっと心配。

それに一人とも美人だから、ほとんどの男性が尻込みしちゃってそうだね。

良い人がいたら紹介してあげたいけど……

私が知つてる良い人つておにいちゃんかユーノくんくらいだからね。

「よしつ、今日もがんばりつつ」

気持ちを入れ替える為にひょりと顔を出す。

シャワーのおかげで眠気も取れだし、今朝は少しがんばってみようかな。

喜んでくれるかな？

最近は時間を見てお義母さんやお母さんに料理を教わってる。

元々苦手じゃなかつたし、教わった事をちゃんと復習もしてきただからそれなりに上達はした筈。

まだまだお義母さんほど上手くはできないけど、それも今のお話。

これから先、絶対にお義母さんを超えてみせるんだからつ！

「」の家の材料や包丁、調味料の位置はとにかくに把握済み。

もう何度もお邪魔している家だからね。

ちなみに嫁姑の関係は良好。

『早く孫が見たい』なんて、つちのお母さんと同じ事様な事を言つてゐるくらいだから、関係が悪化するとも思えないかな。

尤も、つちのお母さんは正確には『早くお婆ちゃんって呼ばれた』って言ってるだけ。

女性としてはあまり嬉しくないんじゃないかなって思つわけでも  
……まあ、人にもよるんだろうけど。

今度ヴィヴィオを連れて海鳴に帰つてみよつかな。

もし引き取り手が見つからなかつたら、私が引き取るつもりだつたしね。

その事を相談したら、あの人も笑つて了承してくれた。

ただその時の目が『仕方ないな』つていつ子供を見る様な目だつたのだけ、ちょっと納得いかない。

その事を追求しようとすると逃げちゃう……

私だつてちゃんと大人なんだからね？

先の事だつてちゃんと考へてるんだよ？

そりや五つも下だと子供に見えるかもしれないけど……そんな私を選んだのはアナタなんだから。

ちゃんと一人前に扱つてほしいよ。

「痛つ」

……指切つちやつた。

絆創膏はどうだつたつけ？

「ジジはお姉ちゃんの専売特許なのに……もしかしてこの間海鳴に  
帰った時に感染った？」

まあとつあえず血が止まるまで……って、あら？

手が引っ張られて何か暖かい物に包まれ……た？

視線をそちらに向ければ寝ていた筈のクロノくん。

私の大事な旦那様。

「ふむ……後で絆創膏を張るよ！」

「あ、ありがと……くろのくん」

すぐに声が聞こえて誰か分かったけど……

指、舐められちゃった。

「うう……こんな処みられるなんて、恥ずかしいよ。

大体寝てた筈なのに、なんで此処にいるの？

「ちなみに君が起きた時にはもう起きていたぞ。」

「寝たフコしてたのっ！？」

「ああ、部屋を出て行く無防備にゆれ……むぐ

「言わなこつ、やの先せ言ひやダメつー。」

叫びながら口を押された。

寝てると毎つ何のまま正しかったよ……

……今度から寝たフリしてないか、絶対確認して。

「もういわなこつ？」

口を押されられたまま、首を縊に。

全へもつ……なんでこつもああこつ意地悪ばっかりするのかな。

「ふむ……死ぬかと思つた

……あれ?

そんなに強く押されたつもつはなかつたんだけど?

「鼻まで押さえる奴があるか、馬鹿者!」

「もうつ、元はといえばクローバンが原因でしそつ?」

それと、馬鹿つて言つた方が馬鹿なんだよ?

「それでも、だ。全く昨日の夜はあんなに……」

「うわわわつ、ダメつ、ちひりダメーフー。」

口をもつ一回、押されようとするナビ。……今度は全部避けられた。

その上で、手首掴まれて逃げられなくなっちゃった。

「別に恥ずかしいのつー？」

「私は恥ずかしいのつー？」

なんでもそこで心底不思議そうな顔するのー？

普通恥ずかしくないつー？

「ふむ。とつあえずシャワーに行つてくへる」

「わつわと行つやひえつ」

「つ、変な処で鈍いというか朴念」とこつか……

変な部分だけ、うちのお兄ちゃんそつくりだよね……

自分の気持ちにはあつたり気付いたクセに、私の気持ちは全然わかつてなかつたし。

「ちやんと絆創膏はつておけよー」

「分かつてますー！」

少しだけ声が荒くなつた。

その事に気付かないワケが無いのに……笑ってる。

「それとな、愛してる」

いきなり唇奪つて、そのまま逃げられた。

朝のキスは少しだけ、血の味がした。

「なつ、くつ……クロノくんつ！」

今日も朝からなのは・T・ハラオウンの声が近所に元気に響いていた。

end .

## ■のびのび（前書き）

- ・初めに

原作とは違う部分が多いかと思いますので、その辺に注意を。  
あとは……自分トコのサイトであげた短編とかは見てなくても大  
丈夫な筈、多分。

それでも構わないという方のみ、先へお進み下さい。

リビングに入ると、クロノくんは新聞を読んだ。  
ちょっと待たせすがちやつたかな？

シャワーの時考へた事もあって、ちょっと髪型で悩んじやつた。

その代わり、それなりの自信はある……かな。

「えつと……お待たせしました」

「あ……ん？」

訝しげな表情つてこうのかな。

何だる……何かおかしい処あつたかな？

一応姿見で一通り確認はしたつもりだったんだけどな。

「どうかしたの？」

「否、今日は髪型変えたんだな、と」

「あ……ちよつと変えてみたんだけど、似合ってない?」

ちよつとドキドキするね。

髪型つてあんまり変えた事なかつたし……

お母さんを参考にやつてみたんだけど……どうかな?

「そんな事はないさ……ただ」

「ただ?」

苦笑してるクロノくんに、ちよつと不安になる。

やつぱり変な処あつたかな?

でも今ならすぐ直せるよね?

……もしもの時はいつも髪型に戻しかばいいんだし。

「いつもより大人っぽいかな、と」

「わ、私はもう大人ですっ!」

つて、言つに事欠いてソレなの? ?

うう……私だつてもう子供じゃないのに。

……不安になつて揃したよ。

「まあ、[冗談だ]。よく似合ひでる」

「…………あう」

最近どんどうくんに勝てなくなつてゐる気がする。

それなのに……全然嫌な気持ちにならないし。

他の人にあんな風に言われると、凄く嫌な気持ちになるのにね？」

「ほら。買い物に行くんだがう？」

「あ…………うん」

それが当然とばかりに手を引かれた。

そのまま家を出て……少し経つた頃。

「まずは服だったか？」

「…………ふえ？」

手にはっきり意識がいつてて、何て言われたのか分からなかつた。

それに物凄い変な返事返しちゃつたし……

だからついクロノくんもそんな呆れた様な目で見ないでもいいのに。

今日は朝から體中狂っぽい。」

わつと全部クロノくんのせいだよ？」

「おこおこ、しつかりしてくれ。今日の買い物は君がメインだわつ？」

「「」「めぐなさい」

でも、でもですね……その手がその……

「今更手を繋ぐくらいで何をそんなに照れてるんだ？」

「く、クロノくんは気にしなさずわざわざだわ」

前に『開き直った』って言つたけど……開き直つずわざだよ。

む、昔はクロノくんの方が『ひつひつ』のダメだったのに……

なんで今は立場逆転しちゃつてるんだり？

クロノくんに何かあつたのかな。

例えばついに来た時に散々弄ばれて開き直つちやつたとか？

「あ、物凄いあつそうな展開かも。」

「ふむ……嫌なら離すか」

「わつ、ダメつ、離しちゃ嫌つ！」

手を離さうとしたクロノくんの腕に抱きつぶ。

それでクロノくんの顔を見て……嵌められた事に気付いた。

だつてクロノくん。

物凄く……意地悪な笑顔で私の事見ていた。

「我侌だなあ」

「'ひ'……どじゅせ我侌だもん。子供だもん」

「ほい……」のへりいで拗ねるな。」

頭、撫でられた。

あつたかくて、大きな手。

撫でられると不思議と暖かな気持ちにしてくれる手。

私の大好きな、手。

「へりのへりがこじわるなのがいけないんだもん」

「仕方ないだろ'ひ'」

そう言つて笑われた。

その事によつとむつとしないでもないけど……

頭撫でる手が気持ち良くて、怒る気分にもなれなかつたよ。

「それに、君も悪いんだぞ？」

「…………私？」

「何が悪いんだろ？……教えてくれたら直すよ？」

気持ちが通じた？

腕に抱きついてた私の耳元。

そこで紡がれた言葉。

私以外の誰にも届かない、そんな声で紡がれていく、言葉。

聞いている内に段々……顔に熱が集まつてくる。

「く、くうのくんつー？」

離れ際、頬にキス。

いつからクロノくんはそんな事が出来るようになったの？

って、とか強つなーつ！

「ちゅっ、ちゅっ、ちゅっ」と行って「よひつか」

「ちゅっ、待つて、待つてば……」

じうにか止めようとしたも…………力の差で引き摺られる。

せめて、せめて顔の赤みが引くの待つて……

「なのは」

「ぐ、クロノくん？」

良かった。

立ち止まつてくれた……これで少し時間を稼げ……

「いひこひのはな。慣れるより慣れろ、だ」

「意味分かんないよつ！？」

いきなり何言い出すの！？

絶対つ、絶対にお母さん・<sup>s</sup>が変な『教育』したんだ。

今、私が、そつ、決めたつ！

明日が明後日ちゅうと『お話』していよつ。

……もう手遅れかもしれないけど。

e  
n  
d  
.

夜……といづみが、夕方のひととき（前書き）

・初めに

原作とは違う部分が多いかと思いますので、その辺に注意を。  
あとは……自分トコのサイトであげた短編とかは見てなくても大  
丈夫な筈、多分。

それでも構わないといづみのみ、先へお進み下さい。

夜……といつも、夕方のひととき

「こんなものか？」

「後は晩御飯の材料だけ」

荷物を持ったクロノくんの問い。

それに上機嫌で答える。

朝からいろいろあつたけど、買い物の方は順調に済んだ。

気に入つた服もちゃんと買えたし、言つ事ないかな？

「やうか……そつこえは明日から戻るんだったか？」

「やうだけど？ クロノくんは？」

「じうするかな」

田の前でクロノくんが眉を寄せて悩んでる。

てつくり同じ様に明日から仕事だと思つてたんだけど、違つたのかな？

「今度の休暇つて長かったの？」

「いや、さつき連絡が来てな……クラウディアのメンテが長引いているみたいでな」

「へえ、無理をせひやつたの？」

「少しね、もう少し頑丈だと黙つてたんだが……」

「……あ、あはははは」

〔冗談のつもりだったんだけどな……〕

新鋭艦のメンテが伸びるくらいの無理つて何をせたんだろ。

それに頑丈だと思つてたつて事は……クラウディア自体に損害出てるつて事だよね？

「仕方ない。明日は騎士カリムの処にお邪魔してくるか

「カリムさん？」

ちょっと意外な名前が出てきた。

出できたついでになんだか胸にもやもやが……むしかして。

私、カリムさんに嫉妬しちゃつてる？

「ああ、たまに六課の事で話をしたり、お茶をうけ馳走になつたりしてゐんでな」

「…………やつなんだ」

やつ言つたクロノくんは少しだけ楽しそう。

「…………ちよつヒシヨック。

カリムセさんとほりょくめぐみつてたんだ。

せりゃお仕事だって分かつて……分かつてもやっぱりダメかも。

せつあまでの気分が急に萎んできた。

「どうかしたのか？」

「な、なんでもないっ」

クロノくんが心配そうに覗き込んできた。

なんとなく皿を叩かせられなくて……拳銃不審? になつて。

そんな私をクロノくんが見てて、居心地悪いといつか落ち着かない。

考えてた事がバレたらどうしよ…… 嫉妬深い女だつて呆れられちゃうかな?

「ふむ…………ああ、安心していいぞ?」

「へ？」

ぽんぽんと頭、叩かれた。

何のことか分からなくて、クロノくんの顔見れば……笑つてた。

「自分の居ない処で他の女性に会つてほしくない。違つたか？」

「そそそそ、そんな事つー?」

図星。

思つてきつた図星。

「セレオでじむると逆に面白くな」

「へーるーのーーんつー

なんでつー?

普段そういうふうの氣付かぬにクセに、なきでいりていつ時、まづかいつ

!?

「なるほど、図星だつたか

「だーかーらーつ、違つてばあつー。」

違わないけど、違うつて事にしておこつー

う、顔真っ赤になつてゐよ絶対。

怒ってるんじゃなくって、恥ずかしくて。

「何、気にするな……嫉妬もされないよりはずっと嬉しいだぞ?」

「人の話聞いてえええっ！」

とにかく捕まえようとして掴みかかるけど……全部避けられた。

荷物持つて何でそんなに動けるの?

不公平だよ……私にもその運動神経分けてほしいよ。

でも嫉妬されるのって嬉しいんだ?

「聞いてる。その上で流してるだけだ」

「…………うう、最近クロノくんの意地悪がどんどん鬼畜めいていくよ」

「失礼だな……だがそうだな、そういうのは夜だけにしておくが

「よつ、夜つて…………？」

夜だけ。

+

鬼畜二。

え？

「しかし……明日から仕事ではな」

「く、くろのくんっ！？ 何かとんでもない事考えてないっ！？」

想像しちゃったモノに顔が火を吹きそり。

かうとうにちらを見る田は……なんていうか背筋が寒くなる様な  
感じ。

クロノくん……絶対良くない事考えてる。

……主に私にとつて、だけぞ。

「いや？ なのはにビーハしたら悦んでもりぐるかをちょっと考えて  
ただけだが？」

「今何か発音がおかしかったっ！」

真面目に語ってるけど……けど、私は見逃さない。

表情が真面目だけど、田だけ笑ってる。

物凄く愉しそうに元気で踊ってる。

「やつか？」

「絶対」「こんな時間に考へる事じやない事、考へてたでしょっーー？」

「例えば?」

「えつ……って言わせないでよっー。」

「こんな場所でそんな事言ひやうとつかぬっーー?」

「うう」

「セレで舌打ちっーー?」

「といひでなこまか最近、絶叫系に田覚めたのか?」

「呟きませんのせクローバーじょっーー?」

「うう……こい加減疲れてきたよ。

今日のクロノくん、何でこんなに意地悪なんだろ……何か泣きたくなってきた。

「ふむ~」

「なんでセレで不思議わつな顔するの?ーー?」

「氣のせいだらう?」

「うう……休みなのに疲れたあ

なんで休日なのにこんな疲れなきやこけないの?

本当に今田さんを買い物して、その後はクローバーと一緒に元のん  
びつするつもりだったのに。

「せうか、なじま家に帰つてみつてしまふよ」

「…………何か寒氣した

ぞわつて背筋こきたよ？」

ぽんぽんと叩かれる頭もいつもみたいに気持ち良くなつよ。

「それじゃ言いがかりという物だぞ？」

「でも絶対何か企んでるでしょ」

そこ、心外そうな表情浮かべてない。

なんとなく分かるんだからね？

ただ、それが何でか…………避けられない運命にあるのが悔しい。

「企んでるというな。疲れてくるなじまシーサージしてたりつと黙  
ただけだ」

「…………じ〜

「僕はそんなにも信用無かつたのか……」

疑つ様な眼差しで見たのが拙かつたのか……

クロノくんは遠い田をして空を見上げたりやつた。

田に涙が見えて、さすがにやりすぎたと思つた。

「わ、違つ、違つのつー。」

それまでからかわれてたから……

その、また嘘か冗談じやないかつて……ね?

「良し、それじゃ材料買つて帰るとするか

」「ヤカに歩き出したクロノくんの背中を呆然と見送る。

そして、その手に持つた物に気付いた。

所謂 田薬と呼ばれる、物。

「だ、騙され……た?」

**夜**……といつまゝ、夕方のひととき（後書き）

……というわけで、個人的に懐かしいお話をアップさせていただきました。

ここまでお付き合いで頂けた皆様に感謝を。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7894v/>

---

『とある休日』

2011年11月11日12時56分発行